

平日午後のオーケストラ Vol.6  
8月28日(金)



# プログラム Program

## 平日午後のオーケストラVol.6

Weekday Afternoon Orchestra Vol.6

2020年8月28日(金)14:00 愛知県芸術劇場 コンサートホール

2:00pm, Friday August 28, 2020 at Aichi Prefectural Art Theater Concert Hall

指揮:川瀬賢太郎(名フィル正指揮者)

Kentaro KAWASE, Resident Conductor

※新型コロナウイルスの影響に係る入国制限により、マクシム・エメリヤニチェフ氏から変更となりました。

コンサートマスター:日比浩一(名フィル コンサートマスター)

Koichi HIBI, Concertmaster

### <ベートーヴェンの二大交響曲>

“Beethoven's Legacy - Symphony No.4 & Eroica”

#### ベートーヴェン:交響曲第4番変ロ長調 作品60

(約33分)

Ludwig van Beethoven (1770-1827): Symphony No.4 in B flat major, Op.60

第1楽章 アダージョーアレグロ・ヴィヴァーチェ

Adagio - Allegro vivace

第2楽章 アダージョ

Adagio

第3楽章 アレグロ・モルト・エ・ヴィヴァーチェ

Allegro molto e vivace

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロッポ

Allegro ma non troppo

休憩 Intermission

(20分)

#### ベートーヴェン:交響曲第3番変ホ長調 作品55『英雄』

(約47分)

Ludwig van Beethoven: Symphony No.3 in E flat major, Op.55 “Eroica”

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ

Allegro con brio

第2楽章 葬送行進曲:アダージョ・アッサイ

Marcia funèbre: Adagio assai

第3楽章 スケルツォ:アレグロ・ヴィヴァーチェ

Scherzo: Allegro vivace

第4楽章 フィナーレ:アレグロ・モルト

Finale: Allegro molto

主催:公益財団法人名古屋フィルハーモニー交響楽団

後援:愛知県・愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会・公益財団法人名古屋市文化振興事業団・中日新聞社・東海テレビ放送

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会

## 川瀬賢太郎 (名フィル正指揮者)

Kentaro KAWASE, Resident Conductor



Photo: Yoshinori Kurosawa

1984年東京生まれ。私立八王子高等学校芸術コースを経て、2007年東京音楽大学音楽学部音楽学科作曲指揮専攻(指揮)を卒業。これまでに指揮を広上淳一、汐澤安彦、チョン・ミョンファンなどの各氏に師事。2006年10月に行われた東京国際音楽コンクール<指揮>において1位なしの2位(最高位)に入賞し、2007年3月には入賞者デビューコンサートで神奈川フィルハーモニー管弦楽団および大阪センチュリー交響楽団を指揮。

その後、東京交響楽団、読売日本交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団を始め、各地のオーケストラから次々に招きを受ける。2011年4月には名古屋フィルハーモニー交響楽団指揮者に就任、意欲的な選曲と若さ溢れる指揮で聴衆を魅了。2014年4月より神奈川フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者に就任。卓越したプログラミングを躍動感あふれる演奏で聴衆に届けている。

海外においてもイル・ド・フランス国立オーケストラとの共演や、ユナイテッド・インストゥルメンツ・オヴ・ルシリンと共演。

オペラにおいても、細川俊夫作曲「班女」、「リアの物語」、モーツァルト作曲「後宮からの逃走」、「フィガロの結婚」、「コジ・ファン・トゥッテ」、「魔笛」、ヴェルディ作曲「アイダ」など目覚ましい活躍を遂げている。

2007年～2009年パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)アシスタント・コンダクター。

現在、名古屋フィルハーモニー交響楽団正指揮者、神奈川フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢常任客演指揮者、八王子ユースオーケストラ音楽監督、三重県いなべ市親善大使。2015年渡邊暁雄音楽基金音楽賞、第64回神奈川文化賞未来賞、2016年第14回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第26回出光音楽賞、第65回横浜文化賞文化・芸術奨励賞を受賞。東京音楽大学作曲指揮専攻(指揮)特任講師。

## ベートーヴェン

### 交響曲第4番変ロ長調 作品60

1806年夏、ベートーヴェン(1770-1827)は、シレジアのリヒノフスキー侯爵の居城に滞在していた。その間に主に作曲していたのが、交響曲第4番と《ラズモフスキー四重奏曲》であった。滞在中に侯爵と姻戚関係にあるオッペルスドルフ伯爵から招待され、ベートーヴェンは伯爵お抱えの楽団による交響曲第2番の演奏で歓待された。おそらくその折に新作交響曲の依頼があったのだろう。第4番は同年秋の完成後、半年の占有期間をつけて伯爵に献呈された。

交響曲第4番は、長大で革新的な第3番《英雄》とは異なり、古典的な第2番に戻ったように見える。しかしこの2年間の成熟は新しい交響曲の中に如実に刻印されている。躍動するリズムのエネルギー、弾けるユーモアの精神、深い叙情性、巧みな楽器法による多彩な音色など優れた特質をもち、傑作の森の中でもひときわ輝く交響曲となっている。

#### 第1楽章

序奏付ソナタ形式。序奏は冒頭4音を展開し、複雑に転調しながら神秘的に歩む。畳み掛けるリズムの第1主題提示は、実に雄大である。木管の第2主題は楽しい。展開部前半では《英雄》と同様に新しい主題旋律が挿入される。その後半の弱音部では遠隔調転調をティンパニのロールが異名同音で繋ぐ。そこから再現部に向けたクレシェンドが実に雄大で素晴らしい。

#### 第2楽章

ソナタ形式。第1主題は美しく瞑想的に歌う。伴奏の飛び跳ねるリズムが執拗に展開変奏される。第2主題はクラリネットでとろけるように美しく歌われる。

#### 第3楽章

スケルツォ。メヌエット表記の版もあるが、ゴツゴツしたリズムはスケルツォそのものといえる。ダイナミックな強弱の対比も見事に構成される。トリオは木管楽器の柔和な旋律であり、ヴァイオリンの合いの手が爽やか。5部分構成は同時期の《ラズモフスキー》第2番などと共通する。

#### 第4楽章

ソナタ形式。第1主題は、無窮動風に暴れ回る。主題自体にユーモアがあり、特に

再現のファゴットは滑稽でさえある。第2主題はオーボエの歌で始まる。コーダは主題から派生した音階上行下行で大いに盛り上がり、最後までユーモラスに終わる。

---

作曲=1806年

初演=[非公開]1807年3月 ウィーン、ロプコヴィッツ侯爵邸(作曲家自身の指揮)

[公開]1808年4月13日 ウィーン、ブルク劇場(作曲家自身の指揮)

編成=フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)

## ベートーヴェン

### 交響曲第3番変ホ長調 作品55『英雄』

ベートーヴェンは交響曲第3番を1803-04年に作曲した。この曲の成立に関して資料研究から面白いことが分かった。チェコのロプコヴィッツ侯爵の金銭出納帳から、『英雄』作曲中に、この交響曲と三重協奏曲のための試演を何度か行っていることがわかる。1804年6月9日付の書類には、ベートーヴェンの試演のために22人の音楽家を雇う支出が2度あったことが書かれている。ロプコヴィッツの宮廷楽師と合わせて26~29人のオーケストラで試演されたことになる。この前代未聞の大交響曲は、侯爵の援助のおかげで、贅沢にも、実際の音を聴いて確かめながら、彫琢を重ねることができたのである。

この交響曲は、これまでの第1番、第2番の倍の長さとなり、しかも内容的にはるかに充実してる。この突然の飛躍の原動力となっているのは、音楽的な成熟とともに、耳疾による死の苦悩を克服した精神的成熟である。この苦闘、死、再生、勝利の体験は、この交響曲の各楽章の象徴的プログラムとみることもでき、後年の交響曲や劇作品で展開されてゆく交響的英雄的理念の先駆けともいえよう。また当初のナポレオンへの献呈の意気込みも、原動力の一つとなっているのだろう(ベートーヴェンが共和主義者として尊敬していたナポレオンが皇帝に就任したことに怒り、献呈を取りやめたことは有名である。逸話では表紙を破り捨てたことになっているが、実際には献辞を激しく抹消し、残された自筆譜のその部分に穴が開いている)。

シンフォニア ・ エロイカ

こうしてできた交響曲《英雄》は、雄大な構想、論理的首尾一貫性、比類のない前衛性によって、ベートーヴェンの中期様式の幕開けであるばかりか、音楽史を後戻りできない地点にまで推し進める画期的な作品となった。

## 第1楽章

ソナタ形式。第1主題は現れるとすぐに和声的葛藤とヘミオラ的なリズムの葛藤にのみ込まれる。提示部より長い展開部では、この2つの葛藤が様々に展開され、ついに「ヘミオラの嵐」と呼ばれる凄まじい頂点に達する。その主題に由来する美しい旋律が歌われる。再現部の直前には大胆にも、属和音の中に主和音のホルンが浮かび上がる。そして長大なコーダ(終結部)では葛藤が解決され、主題による勝利のファンファーレが高らかに鳴り響く。ソナタ形式がまさにドラマのように構成されているのである。

## 第2楽章

葬送行進曲。バスの重い足取りの上に、ハ短調の沈鬱な葬送の旋律が歌われる。ハ長調の挿入楽句の後、葬送の主題が展開され、幅広いフガートとなる。続く第2挿入楽句は、ラッパの吹奏による最後の審判の場面が連想される。コーダはナポリの変ニ長調で、天国的世界を一瞬現出させる。最後は葬送の主題まで切れ切れに解体してしまう。

## 第3楽章

スケルツォ。まずヘミオラ的なリズムをばかし、民謡調の主題では調性をばかし、最後の全奏で初めて主調が現れるという、巧妙な仕掛けが作られている。トリオでは当時の交響曲では珍しい3本のホルンが効果的に働いている。

## 第4楽章

自由な変奏形式。主題は、コントルダンスWoO14-7、バレエ《プロメテウスの創造物》、ピアノ変奏曲Op35で使われたものである。ここではピアノ変奏曲と同様に、主題をバス要素と旋律要素に分けて変奏が展開される。バス要素を第1主題、旋律要素を第2主題とするソナタ形式のように解釈することもできるだろう。展開部の始めと終わりには、2つの美しいフガートが入り、再現部はポコ・アンダンテの第9変奏から始まる。コーダで序奏の強力なユニゾンが戻ってきて、躍動するファンファーレでこの巨大な交響曲を締め括るのである。

---

作曲=1803-04年

初演=[非公開]1804年後半 ウィーン、ロブコヴィッツ侯爵邸(作曲家自身の指揮)

【公開】1805年4月7日 ウィーン、アン・デア・ウィーン劇場(作曲家自身の指揮)

編成=フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)